西川長夫の著作における〈新〉植民地主義のテーマについて

中村隆之

1. はじめに

本論で取り組む課題は，西川長夫の『〈新〉植民地主義論――グローバル時代の植民地主義を問う』（平凡社，2006 年）に集約される視座をめぐるものとなる。遺著となった論文集がある経緯を経て『植民地主義の時代を生きて』（平凡社, 2013 年）という題名のもと刊行されたとおり[1)]，西川の後年の仕事の主軸のひとつは，植民地主義の問題群を再考することにあったと言える。

そこで本論では「〈新〉植民地主義」という主題について若干の考察を試みたい。まずこの語の来歴を確認し，「〈新〉植民地主義」の定義を西川の著作を辿りながら検討する。そのさいに注目するのがクワメ・ンクルマとエメ・セゼールの著作である。とりわけセゼールの著作との比較を通じて，「〈新〉植民地主義」をめぐる著者の叙述の特徴について考えてみることにする。

2. 〈新〉植民地主義について

植民地主義に鉤括弧で〈新〉をつけた，この新たな術語を西川長夫が用いることにした経緯は『〈新〉植民地主義論』の第 1 章に詳しい。まず「植民地主義（colonialism）」に関する著者の定義は「先進列強による後発諸国の搾取の一形態」あるいは「中核による周辺の搾取の一形態」というものである（同書，53 頁）。「新植民地主義（neo-colonialism）」は，本書の別の箇所で述べられているように，ガーナ初代大統領クワメ・ンクルマの有名な規定で説明される。すなわち，「新植民地主義の本質とは，新植民地主義に従属する国家が理論的には独立しており，インターナショナルな次元では主権国家のバッジをひとつ残らずつけているということだ。ところが実際は，その国家の経済，したがってその政策は，外部から操られているのである」[2)]。新興諸国の経済的収奪を言い表した「新植民地主義」については，日本でも 1960 年代に，帝国主義批判と社会主義支持の学問的立場から「アジア・アフリカ問題」に取り組む研究者によって熱心に論じられてきた[3)]。実際，この語は西川にとってもアジア・アフリカの独立後の植民地問題と結びついており，1955 年のアジア・アフリカ会議（バンドン会議）および 1960 年の国連総会で採択された「植民地独立付与宣言」が真っ先に思い起こされる，とある箇所で述べている（『〈新〉植民地主義論』，49 頁）。

その点を確認した上で，「〈新〉植民地主義」という術語に目を向けよう。この語には 2 つの意味が込められている。1 つは，グローバル化の進行に伴う植民地概念の変化である。領土支配を前提とした旧来の植民地主義に対し，今日の植民地主義は，もはや国家を主役にした支配－従属関係ではなく，領土支配を必要としない，資本の運動によって規定されている。この意味

で「〈新〉植民地主義」は「植民地なき植民地主義」だという特徴を有する。いま1つは，資本の集中するグローバル・シティ，国境を越えて大都市に集まる労働力の移動や，国内における経済格差と搾取－被搾取関係を捉える枠組みとして,「〈新〉植民地主義」という語が用いられる。これは「国内植民地」をめぐる議論を引き継ぐという企図もある。

西川は「ポストコロニアル研究」には一定の距離を置く。上野千鶴子との対話では，宗主国と植民地の関係を支配－従属関係として捉えてきた植民地主義研究に対し，ポストコロニアル研究はこの関係を「相互的にとらえようとする」(『植民地主義の時代を生きて』，367頁)。ポストコロニアル研究は「自分のなかに宗主国と植民地主義の切り離すことのできない相互的な関係を持ってしまった人たちの議論」であり，そうした知識人と話すときに「忘れ去られた「新植民地主義」を思い出せ，と思うことがある」と述べている（同書，368頁)。

実際，ポストコロニアル研究と比較することで西川の立場はよりいっそう明確となる。筆者の整理ではポストコロニアル研究は，植民地主義に端を発する政治と文化の関係を主に問う。フランソワ・キュセの『フレンチ・セオリー――アメリカにおけるフランス現代思想』（桑田光平ほか訳，NTT出版，2010年）にあるように，アメリカ合衆国から始まる「ポストコロニアル研究」がいわゆるフランス現代思想のインパクトを伴って大学内でのマイノリティ，ジェンダー，人種を「問題化」する学生および教員の政治意識と結びついて展開してきた。

これに対し，西川が「新植民地主義」にこだわるとき，経済の観点がはっきり前景化してくる。ンクルマの著作『新植民地主義』の大半は，帝国主義列強の大企業によるアフリカの資源独占の分析に費やされていた。そのことを思い起こすだけで十分だろう。新植民地主義を問うことは，新興諸国と旧宗主国における経済格差と富の再配分を問うことである。すなわち，資本主義と階級をめぐる問いが「新植民地主義」という言葉の復権によって改めて浮かび上がる。

ポストコロニアル研究との関連で，西川の批判する「知的植民地状況」にもここで言及しておこう。日本での知的言説の受容のなかに作用する「アメリカ化」への警鐘である。「アメリカ化」が経済と軍事の領域のみならず知的言説においても深められてゆくという事態について西川は，グローバル化に関わるさまざまな知的言説が，反グローバル化の意図で述べられていようとも，世界の中心が依然としてアメリカであるということを結果的に語っているという。「植民地主義や欧米中心主義があれほど厳しく批判された後で，私たちはかつてないほど強力な植民地主義と欧米中心主義をグローバリゼーションの名のもとに受け入れているのではないか」(『〈新〉植民地主義論』，261頁）という言葉を，筆者は聞き流すことができない。

西川が「〈新〉植民地主義」という語を用いるのもまた，「知的植民地状況」との関わりで捉えるときに別の意味を帯びる。この術語の系譜に連なるのは，植民地から発信される知識人の言葉である。すでに引いているンクルマのほかに，ここで思い起こしたいのはエメ・セゼールである[4)]。

3. セゼールの『植民地主義論』

『〈新〉植民地主義論』はセゼールの『植民地主義論』を明らかに踏まえたものである。前者に収められた「マルチニックから沖縄へ」では，当時の著者にとって『植民地主義論』が「秘

密の参照文献」にして「座右の書」であったことが明かされている（同書, 128 頁）。『ふらんす』2013 年 4 月号でセゼールの生誕 100 周年の特集が企画されたさい, 西川は「エメ・セゼールの『植民地主義論』について」という文章を寄せた。そのなかで著者はセゼールのこの作品が「植民地の住民の側からの視線で書かれた最初の本格的な植民地主義論として，植民地主義論の文献の冒頭に置かれるべき書物」だと述べている（「エメ・セゼールの『植民地主義論』について」, 17 頁）。しかしながら，その位置づけがなされないのは,「彼の『植民地主義論』が，今もなお植民地主義研究に内在する植民地主義を鋭く突いているから」ではないかと問う（同頁）。セゼールの『植民地主義論』を文献の冒頭に置くということは,「西欧近代文明の全体と本質にかかわる問題」（同論文，18 頁）として捉えられた植民地主義に，植民地主義研究それ自体が向き合うところから始めなければならないということだ。すなわち，西川が自らの著作の題名を『〈新〉植民地主義論』としたとき，まさに著者はセゼールの植民地主義批判のプロジェクトをこの時代に応用する形で引き継ごうとしたのだと筆者は推測する。

西川は『〈新〉植民地主義論』の冒頭でこう述べていた。「図式的に言えば，セゼールのネグリチュードと植民地主義論は, 領土的な支配をめざす古典的な植民地主義論に対応しており,「植民地なき植民地主義」に対応するのはクレオール主義と多文化主義さらにはポストコロニアリズムである」と（『〈新〉植民地主義論』，14 頁）。しかしながら，この図式にも関わらず,「植民地なき植民地主義」を論ずる西川の構えが,「クレオール主義」でも「多文化主義」でも「ポストコロニアリズム」でもなく，セゼールのそれにあることは強調すべきである。これらの語は，異なる文脈にありつつも，植民者と被植民者という支配／従属関係を固定化しない点で，共通している。言い換えれば,「植民地なき植民地主義」の時代では，支配／従属関係は複雑化し，場合によっては相互的になる。しかし，その相互性を強調することで，複雑な支配／従属関係を隠蔽してしまう危険もある[5)]。西川が多文化主義を「植民地主義と背中合わせの思想であり現実」だと述べ，その両義性を強調するのも（『〈新〉植民地主義論』，157 頁），明確な線引きができない時代において，実際は存在するものの，見えにくい支配／従属関係を明るみに出そうと考えたからだったはずだ。

この両義性は, 時代の両義性でもあると同時に, この時代に対応する文化論の両義性でもある。それゆえ，すでに見ているとおり，西川は自らの足場をポストコロニアリズムよりも植民地主義論に置き，そこから新たな植民地主義の形態を考察しようとした。

4.『マルドロールの歌』から『植民地主義論』へ

以上,「〈新〉植民地主義」をめぐる西川の立場と構えを確認した上で，セゼールの『植民地主義論』に立ち戻る。西川の議論に導かれながら，セゼールの『植民地主義論』について，それがなぜ「植民地主義論の文献の冒頭に置かれるべき書物」でありながらも不当に無視されるのかを考えてみよう。

この著作で糾弾されているのは，プロレタリアート問題と植民地問題を自らの手で解決できない「西欧文明」であり，ブルジョワ階級が槍玉に挙げられている。セゼールはマルクス主義の語法でブルジョワ階級の野蛮と堕落について語る。その野蛮と堕落は，政治家セゼールがフ

ランス国民議会において直面する，植民地問題もプロレタリアート問題も自らの手で解決しようとしない政治家たちの発言や態度のうちに見られる。セゼールは西欧の書き手のなかに見られる反知性，優越意識，似非ヒューマニズムをことごとく糾弾する。

このような全体の論調のなかに，一見余談のように差し挟まれているのがロートレアモンの『マルドロールの歌』（石井洋二郎訳，ちくま学芸文庫，2005年）をめぐる考察である[6)]。しかし，この箇所にこそ実は『植民地主義論』の破壊的な批判力が認められると考えられる。

セゼールは『マルドロールの歌』で語られる悪逆無道を，スキャンダラスなもの，怪物的なものとして捉えることはしない。そのような視点はセゼールが批判するヨーロッパのモラリストのそれである。そうではなく，そこで語られている〈悪〉が，資本主義社会の実態を比喩的に描き出したものだとセゼールは捉える。セゼールはこう述べる。

> ロートレアモンが「敵」となしたあの敵，人肉を食らい，脳髄を喰らうあの「創造主」，「人間の糞尿と黄金で造られた王座にふんぞりかえった」あのサディスト，あの偽善者，あの放蕩者，「他人のパンを喰い」，時折「一晩に三樽の血を喰らったシラミのように」泥酔しているあの怠け者――あの創造者とは，雲の彼方に探し求めるべきものではなく，デフォッセ年鑑やどこかの居心地の良い取締役会あたりで見つけられる可能性の方が高いようなものなのだ（セゼール『植民地主義論』砂野幸稔訳，平凡社ライブラリー，2004年，182頁）。

『マルドロールの歌』のうちに1865年頃のフランス社会の貧富の格差を読みとるこの解釈は，『植民地主義論』の論理においては重要である。ロートレアモンと共にボードレールに言及するセゼールは，ブルジョワ批判の文脈で，文学のうちに描かれる，ある種の倒錯的な批判力をここで擁護していると捉えることができる。そのような倒錯的な語法を，フランス国民議会の議員たちは用いないだろう。おそらく彼らは倫理的規範に叶った，いわゆる正しい言葉遣いで，植民地問題を巧妙に斥けるだろう。セゼールがこの評論で批判するものは，そのようないかにももっともらしい語法のもとで覆い隠される，根源的な〈悪〉である。

セゼールの『植民地主義論』とは，たしかに被抑圧者の側から語られる徹底的な植民地主義批判である。しかし，筆者の理解では，彼の批判は，植民地住民であることの怒りを絶対的な正義に昇華するような類いのものではなく，その怒りをむしろボードレール，ロートレアモンの系譜に連なる倒錯的語法において表現している。〈敵〉をスキャンダラスに見える仕方で批判する過剰な修辞法が，『植民地主義論』の文体上の特徴をなしていると考えられる[7)]。

5. 私自身を問うこと

『植民地主義論』の修辞的特徴は，類い稀な植民地主義批判を可能にしていると共に，研究において敬遠される心理的な理由になるとも推測される。このような批判の調子は，明晰な論述のスタイルをとるンクルマの『新植民地主義』にも，西川の『〈新〉植民地主義論』にも見られない。

たしかにンクルマの『新植民地主義』も，セゼールの『植民地主義論』のように，欧米に対

する批判と告発の書である。しかし，ンクルマは欧米による経済的独占の事実を暴き，淡々と記述する方法をとる。これに対し，セゼールの書き方は論理と感情が分かちがたく結びつき，読み手の情緒に強く訴えかける力を有している。

では西川の『〈新〉植民地主義論』はどうか。論集として出版された同書は，論文と口頭発表原稿の双方から成り立っている。「〈新〉植民地主義」と著者が名づける事象に理論的にアプローチすることに重きが置かれるこの著作の文章は，「である」体にしろ「ですます」体にしろ，明確な概念規定とそこから導かれる論理によって築かれている。

しかし，その文章は，いわゆる「アカデミック」なものでない。『植民地主義の時代を生きて』の「あとがき」で記されるように，西川は論文の形式を批判的に捉え，とりわけ博士論文を「大学やアカデミズムの権威を支える中心的なシステム」にして「権威主義の典型」だと書き記す（『植民地主義の時代を生きて』，580 頁）。西川は学術論文に求められる形式からの脱却を意図的にはかっている。

そこには，「国民国家の統治原理は植民地主義的である」という著者のたどりついた結論（前掲書，229 頁）に連なる認識が見てとれるかもしれない。西川の批判精神が発揮されるのは，植民地主義と連動する諸問題を，みずからに，あるいは日本の言論人に向けるときであるように思える。

たとえば，大江健三郎の『沖縄ノート』（岩波新書，1970 年）については「沖縄を通じて自己の内なる日本人を変えようとする，大江健三郎の執念と勇気に私は感服する」としつつも，「だが，大江が幾度悔い改め，幾度自己批判をくりかえしても，帰ってゆくところは結局，「日本人」なのだ」と批判する（『〈新〉植民地主義論』，131 頁）。また，辺見庸の『瓦礫の中から言葉を――私の〈死者〉へ』（NHK 出版新書，2012 年）を 3.11 以後に読んだもののなかで「一番よかった本」に「躊躇なく」あげるとしながら，生者の立場から他者の死を語ることやその「仏文的教養」への違和感もまたきっぱりと表明している（『植民地主義の時代を生きて』，570-572 頁）。

これらの批判は，自己の批判的検証と不可分ではないだろう。西川は『〈新〉植民地主義論』の「まえがき」に当たる文章をこう締めくくっていた。

> 植民地主義を批判的に問うことは，国民国家と資本主義の両者の変容と，さらにはその共犯関係がもたらす差別と搾取の歴史を根底から問うことになるだろう。植民地主義を批判的に問うことは，文明概念の根本を問うことであり，五世紀続いた支配的な西欧文明と西欧文明を内面化した非西欧文明の全体を，したがって近代と呼ばれる時代の総体を，さらにはその中に生きる私自身を，根底的に問うことであると思う。（同書，30 頁，強調筆者）

この文は「あとがき」で要約的に繰り返されるが，そのなかで「私自身を，根底的に問うこと」という箇所は「私たち自身を，根底的に問うこと」と言い直されている（同書，265 頁，強調筆者）[8]。問われる主語が一人称から一人称複数形に拡張されるとき，この「私たち」には，この引用文の文脈を共有する人びとすべてが入るだろう。大江や辺見という同時代の書き手に対する批判的視座は，西川自身のこうした自らを批判的に問う構えに基づいている。

西川長夫の論述的文体の底流をなしているのは，内なる植民地主義に対する，この絶えざる

自己検証の態度ではないだろうか。言論に携わる者たちが「〈新〉植民地主義」の問題群を各自の持ち場で批判的に考えることは，「近代と呼ばれる時代の総体」の中に生きる「私自身を，根底的に問うこと」だという西川の言葉を共有することでもあることを確認して，本論を閉じたい。

注

1）もともと「再論の時」という題名で進められていた本書の原案が形を変えて「植民地主義の時代を生きて」の題名で刊行された経緯については，同書「あとがき」を参照されたい。

2）クワメ・エンクルマ『新植民地主義――帝国主義の最終段階』家正治，松井芳郎訳，理論社，1971年，11頁。引用はフランス語訳からの拙訳。

3）岡倉古志郎『アジア・アフリカ問題入門　第二版』岩波新書，1967年。

4）セゼールに関しては次の拙稿を参照されたい。「エメ・セゼールを読む3つの理由――共和主義・ディアスポラ・第三世界」『ふらんす』2013年6月，12-14頁。

5）現代アフリカにおける貧困問題を考察するさいに「新植民地主義」がいまもなお有効な理解の枠組みを与えてくれることを以下の論考は教えてくれる。ムンシ・ヴァンジラ・ロジェ「コンゴはどうして貧しいか――新植民地主義とアフリカの未来」中村和恵編『世界中のアフリカへ行こう――〈旅する文化〉のガイドブック』岩波書店，2009年，60-80頁。

6）この箇所は，1955年のプレザンス・アフリケーヌ社版ではロジェ・カイヨワ批判を収めたセクションの冒頭に補足的につけられている印象を与えるが，1950年のレクラム版を確認すると，カイヨワ批判の箇所が新たに加えられた長大な付け足しであることが分かる。Aimé Césaire, *Discours sur le colonialisme*, Paris : Réclame, 1950, pp. 52-55.

7）『植民地主義論』の文章は，イジドール・デュカス『ポエジー』における詩人・作家の批判や風刺箇所をとりわけ彷彿とさせる。

8）「植民地主義を批判的に問うことは，国民国家と資本主義の変容と，両者の共犯関係がもたらす差別と搾取の歴史を問うことであり，さらには五世紀続いた支配的な西欧文明とそれを内面化した非西欧文明の全体を，したがって近代と呼ばれる時代の全体とその中に生きている私たち自身を，根底的に問うことになるだろう」（『〈新〉植民地主義論』，265頁，強調筆者）。

本論で言及した西川長夫の著作

『〈新〉植民地主義論――グローバル時代の植民地主義を問う』平凡社，2006年。
『植民地主義の時代を生きて』平凡社，2013年。
「エメ・セゼールの『植民地主義論』について」『ふらんす』2013年6月号，pp. 17-18。

付記

本論は，立命館大学国際言語文化研究所の2014年度連続講座「西川長夫――業績とその批判的検討」第5回「新植民地主義論の射程」（10月31日）で読み上げた口頭発表原稿「西川長夫，〈新〉植民地主義の思想家として」を改題の上，加筆・修正を加えたものである。